

第三章 「交わり・即・存在」—人格 (ペルソナ) のパラドックス

1. 2. 「御父・御子・聖霊」の三位一体の神の内的生命の探究

1) 神の啓示への信仰に頼る探究→神学的基礎づけ

神の内的生命についての深い信仰の神秘の洞察/神の業としての創造と救いに光を当てる教え

2) 最高に「一」なる神の三つのペルソナの実在的区別の認識(「一は多(三)である」という矛盾解決で、形而上学的難題)

3) トマスの革命的定義

(1) ボエティウス(480?~524?)の古典的定義

理性的本性を有する個の実体

(2) トマスの定義

自ら存在する関係(自存する関係)

Ex 親子、夫婦、交戦、交友の関係

御父と御子、御父と聖霊との間の「交わり」「関係」

(3) 「交わり」「関係」の存在→「交わり・即・存在」

信仰の神秘への新しい神学的理解の道への開示

3. トマス存在論の再発見

1) 14世紀以降の潮流

人格(ペルソナ)概念→個の実在、存在(個とは個体、個人、人格(ペルソナ=個人))

2) エティエンヌ・ジルソン(1884-1978)の「出エジプト記形而上学」

トマスの定義←旧約聖書『出エジプト記』の「わたしはある」からの靈感

3) 稲垣先生の説明の「愛」にもとづく神的「存在」の理解

ジルソンの考え方に加えて、新約聖書『ヨハネの第一の手紙』の「神は愛である」

トマス存在論の再発見、存在論の根源的転回

4) 現代人間学、社会哲学の限界→近現代の人間中心主義の存在論の限界

(1) 人間の認識は感覚から始まる/人間の知性が初めに捉えるのは存在である

(2) 人間が存在を捉える場は感覚的事物の世界である

(3) 人間の原初的で根源的な「存在」理解は日常経験の「場」で成立する

(4) (1)~(3)はウィリアム・オブ・オッカム(1285~1349)の

「存在するものはすべて個体である」「個体のみが実在する」の個体主義の流れを汲んでいる

5) 神に関わる問題、人間社会における「交わり」「絆」の問題の理論的探求、基礎づけのトマス存在論の再発見

4. トマスの実在としての「三位一体」論

1) キリスト信者にとって必要不可欠なトマスの「三位一体」の神学

2) 理由1 神による万物の創造理解のために

→「初めに神は天地を創造された」

神による万物の創造は自然本性の必然性の流出ではなく、

神の知恵と愛による業(わざ)であり、神による救いの歴史の観点から理解すべき

理由2 「三位一体」の御父、御子(御言)、聖霊(愛)のペルソナの実在に関する知識は、人間の救いを理解するために必要
(ex キリストの十字架の死→人間の救い)

5. トマスの神の「知と愛」の考察

- 1) 神の「一性」を深く理解する試みとしての三つのペルソナの区別
- 2) 三つのペルソナの実在は、神による発出(prosecchio)、起源(origio)によって生ずる神の内的な関係にもとづく
- 3) 万物の創造は御父の御子による知的御言(みことば)の流出、意志の働きにもとづく聖霊の愛の発出という神の救いの業

6. 7. 8. 「御父・御子・聖霊」の三位一体のペルソナの区別は神の啓示に対する信仰のみによって肯定

- 1) 有限の人間理性ペルソナの区別の認識に到達することは不可能(信仰によってのみ)
- 2) しかし、人間理性は無限の可能性を有する力であり、神の啓示の真理に自らを開き、自己超越(一種の自己否定)によって、ペルソナの区別について何らかの認識に到達することができる
→「知られざるままの神に触れる」
- 3) トマスの「三位一体」論
神の啓示による真理、信仰の神秘に自らの心を開くことによる神認識である

9. 人間理性による神の「一性」認識と、信仰による「三位一体」認識の関係

- 1) 「三位一体」による神の内的生命への導き、神の「一性」の意味をより深く、より豊かに悟る教え
- 2) 御父、御子、聖霊のペルソナは、神の構成要素、部分ではなく、「関係」「交わり」の実在性である

10. 11. 12.

- 1) 一般に「人格(ペルソナ)」とは、自己意識を持つ存在、自己認識・自己支配の能力を持つ行為主体
- 2) トマス→「ペルソナは理性的本性において自存するものである」
- 3) 神の三位一体の人格(ペルソナ)とは、「自存するものとしての3つの実在の関係」「交わり・即・存在」ということになる
- 4) 人間の人格(ペルソナ)論においても、「交わり」「関係性」の視点は重要
他者との交わり、家族、地域共同体、国、世界と拡大することは、ペルソナ性の完全に向けてに実現
稲垣先生の仮説—神の存在・本質は「愛(アガペー)である」というペルソナ論的な存在論
→「ギリシア哲学の源流」+「聖書の靈感」→根源的転回・発展したという仮説
→存在そのものである神は「最高善」であり、神の本姓(神の存在)は善性にある
→その善性は愛の観点から解明
→善の本質的側面は自己をおしひろげ、自己を他者に分与することである
→「三位一体」論神学を基礎づける「愛(アガペー)」の分与